学生海外調査研究		
ドイツ語圏における日本音楽研究		
氏名　田辺　沙保里		比較社会文化学専攻
期間	2014 年 9 月 1 日　～　2014 年 9 月 22 日	
場所	ケルン（ベルリン・ライプツィヒ）	
施設	ケルン日本文化会館・ベルリン日独センター・ドイツ国立図書館	

内容報告

1. 海外調査研究の必要性と目的

現在、ドイツ語圏における日本音楽研究の過程、及び日本音楽の公演の歴史を明らかにすることを目的とし、調査を進めている。海外の視点から日本文化を捉えることがますます重要視される昨今、異文化受容や文化外交に関する多くの課題を内包する海外公演について検証する必要がある。また、その歴史的変遷を読み解く上で、ドイツ語圏における日本音楽の研究史を辿ることは不可欠であると考える。

目下、この公演史及び研究史において特に注目しているのは、ドイツ西部の都市ケルンとその周辺における 1970 年代から 80 年代の動向である。国際交流基金の海外拠点であるケルン日本文化会館の開館、『和楽―日本伝統音楽研究 *Studien zur traditionellen Musik Japans*』[1]の刊行、日独両国において開催された日本音楽研究のシンポジウムシリーズ[2]、83 年にデュッセルドルフで開催された大規模な「日本週間（Japan Woche）」での公演等の出来事を通して、この頃ドイツ語圏での日本音楽受容はケルンを中心として新たな局面を迎えている。また、これらの機会によってドイツと日本の音楽学者や演奏家たちの間に生まれた交流は、現在に至る公演及び研究活動等にも影響を及ぼしているといえる。

今回の派遣にあたり、当時の状況を裏付けるデータを収集するため、ケルンを拠点として実施されてきた日本音楽の公演に関する資料調査を主眼とした。また、70 年代から現在に至るまで、ドイツ国内における日本音楽の研究及び紹介に重要な役割を担ってきたハインツ=ディータ・レーゼ（Heinz-Dieter Reese 1952-）氏への聞き取り調査を依頼した。渡航時期を 2014 年 9 月に設定した理由は、レーゼ氏が担当する一中節公演が開催される期間に、今日の海外公演の現場を観察するためである。他方で、今後の研究への布石として、時代や地域を限定せず、ドイツ語によって著述された日本音楽に関する文献資料の探索も試みた。

以下、各調査【⑴ケルン日本文化会館（国際交流基金海外拠点）における資料調査、⑵ハインツ=ディータ・レーゼ氏への聞き取り調査、⑶日本音楽の海外公演における参与観察、⑷ドイツ国立図書館（DNB）における原書の閲覧】において実施した事項を詳述する。尚、本調査研究は、国際的な女性リーダーの育成を目指した「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プログラムによる助成を受けて実施された。

2. ⑴ケルン日本文化会館における資料調査

ケルン大学、東アジア美術館と同様 Universitätsstraße に位置するケルン日本文化会館（Japanisches Kulturinstitut Köln (JKI) 1969 年 9 月開館）は、独立行政法人国際交流基金のドイツにおける海外拠点である。ここでは、ドイツ語圏における日本文化の紹介、日本理解の促進、日独交流、日本語学習及び日本研究の奨励等を目的に活動が行なわれており、数年毎に日本から派遣される職員とドイツの現地職員により運営されている。館内には約 200 名の収容が可能なホール、展示のためのスペース、セミナールーム等があり、日本文化に関するコンサート、展覧会、映画会、シンポジウム等が開催されるほか、日本語学習者のための日本語講座も開講されている。催物に際して作成されたプログラム冊子やカタログ等の会館出版物は、受付において購入することも可能である。また、日本関係の蔵書を収集した図書館には、ドイツ語圏における日本文化の理解促進や日本学研究者支援のために、約 2 万点の資料が揃えられている。

2.1. 事業報告書（Übersicht der Tätigkeit）のデータ収集

ケルン日本文化会館内図書館司書である蓮沼氏の協力を得て、開館の翌年 1970 年から 2002 年[3]までの全事業が記録されている報告書を閲覧および写真記録により保存した。この報告書は、年度毎に発行され全てドイツ語により記載されている。表紙や序文、項目立て等の記載方法には数年で多少の変化がみられるものの、館内外で実施された事業が一覧化されているため、公演日時や公演者等について知る手掛りとなる資料である。ここに記録された項目は主に以下のように分類されている。

1. KULTURELLE VERANSTALTUNGEN（催物）／1.1. Sonderveranstaltung（特別な催物）／1.2. Symposien im Hause（館内シンポジウム）／1.3. Vorträge im Hause（館内講演会）／1.4. Filme im Hause（館内映画会）／1.5. Filme außerhalb des Hauses（館外映画会）／1.6. Konzerte im Hause（館内コンサート）／1.7. Ausstellungen im Hause（館内展覧会）／1.8. Diskussionen im Hause（館内討論会）／2. BIBLIOTHEK（図書館）／3. SPRACHKURS（日本語講座）／4. STIPENDIUM（奨学金）／5. BÜCHERSTIFTUNG（寄贈図書）／6. INFORMATIONSDIENST（情報提供）／7. MITVERANSTALTUNGSDIENST（共催事業）／8. VERMITTLUNGSDIENST（仲介事業）／9. SONSTIGES（その他）／10. PERSONALIEN（職員）

これらのデータを整理することで、開館から現在までの 45 年間にどのような催物が行なわれ、ドイツ国内において日本文化が紹介されてきたのか、その特徴や傾向を分析したいと考えている。

2.2. 1983 年「日本週間（Japan Woche）」の資料収集

1980 年代には、ドイツにおける日本音楽の公演も活発に行なわれるようになり、これらは受容面に影響を及ぼす契機となったといえる。中でも 1983 年にデュッセルドルフにおいて開催された大規模なフェスティバル「日本週間」は象徴的である。このイベントでは、数多くの展覧会の他、文楽、雅楽、早池峰神楽、三曲等の公演が行なわれた。特に『妹背山婦女庭訓』より《花渡しの段》と《山の段》が上演された文楽は、後述するハインツ=ディータ・レーゼ氏の業績においても重要であり、彼が初めてプログラムノートを執筆し、解説を行なった公演である。この文楽は同年ベルリンにおいても上演された。また、この一連の公演に先駆けて、1982 年にはケルン日本文化会館で能、歌舞伎、文楽、近松門左衛門をテーマとした 4 つの講演シリーズも行われた。

館内の図書館には、83 年の「日本週間」に関するいくつかの資料が残されていた。例えば、文楽、雅楽、神楽等の公演プログラム冊子、展覧会の図録、また特筆すべきは 400 以上に及ぶ新聞記事のスクラップが見つかったことである。これらは今後の研究にとって極めて貴重な資料となり得るので慎重に整理し読み解いていきたい。

3. ⑵ハインツ=ディータ・レーゼ氏への聞き取り調査

ハインツ=ディータ・レーゼ氏は、1994年から現在に至るまでケルン日本文化会館の文化担当部局に勤務し、日本伝統音楽の研究及び公演のマネジメントを行なっている。彼はケルン大学音楽学研究所においてロベルト・ギュンター（Robert Günther 1929-）氏に学び、1978年には半年間の日本留学を経て、平野健次ら日本の音楽学者たちとも親交を深めている。80年代以降には「日本週間」をはじめとする様々な伝統音楽公演のプログラム冊子やラジオ番組の制作に携わっている。これらの活動はドイツにおける日本音楽の受容に大きな影響を及ぼしていると考えられる。その根拠として、例えば新聞批評には彼の執筆したプログラムノートの引用も見られる。冊子等の有形の産物は勿論、公演のために訪れた演奏者をケアし滞在期間中のマネジメントを担ってきたこともまた彼の功績といえる。

今回の調査研究では、彼が文化会館業務として担当した公演の参与観察が実現した。また、これまでも資料提供や聞き取り調査等で全面的な協力を得ているが、今回のインタビューでは主に、83年の「日本週間」について、最も印象深かった公演（1987年の能公演）について、演奏家や研究者との親交について伺った。これにより1970年代から1980年代のケルンにおける日本音楽受容の一端を知る重要な手掛りを得ることができた。

4. ⑶日本音楽の海外公演における参与観察

2014 年 9 月 10 日にケルン日本文化会館において、また翌々日の 9 月 12 日にはベルリン日独センター（Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin (JDZB)）において、一中節と山田流箏曲のドイツ公演「『江戸音楽の楽しみ』箏と三味線の繊細な音色 *Die Kunst des subtilen Klangs* −Konzert mit koto- und shamisen-Musik aus Edo (Tokyo) um 1800−」が開催された。この公演は、ベルリンと東京都の友好都市提携 20 周年記念行事の一環という位置付けで、JDZB 館長坂戸氏の呼びかけにより、ケルン日本文化会館が共催して実現された。プログラム冊子はレーゼ氏による執筆で、彼は他に、字幕作成とその操作、公演前の解説、演奏者の随行も務めた。いずれの公演もほぼ満席となり(図 1)、アンケートにも

好意的な声が寄せられた。以下はケルン公演の際に回収されたアンケート 60 通の集計結果である。
【評価アンケート *Die Kunst des subtilen Klangs*（9 月 10 日 於: JKI）】（回収数: 60／観客数: ca.200）

ｉ．この公演をどのように知りましたか？　（複数回答可）

JKI のニュースレター	16	26.67%
JKI のホームページ	9	15.00%
JKI の Facebook ページ	1	1.67%
JKI の月刊プログラム案内	16	26.67%
チラシ	7	11.67%
新聞/雑誌から	13	21.67%
友人/知人から	10	16.67%
その他	9	15.00%

ii．この公演をどのように評価しましたか？

とても良い	52	86.67%
良い	5	8.33%
満足	0	
不満足	0	

図 1 開演前の会場内（ほぼ満席の状態）

iii．ii で評価した理由
音楽・演奏者（25）／題名（12）／プログラム冊子（9）／レーゼ氏の解説（7）／照明（3）／雰囲気（3）／楽器（3）／会場（2）／歌（2）／衣装（1）／舞台装置（1）／音の響きに心から感動した／一中節には多少の慣れが必要である／松の羽衣がとても美しかった／人々が古くからの芸術に生涯を捧げる姿を見ることは素晴らしい／伝統的な音楽の高度な技巧が彼らの集中力と静寂を通して良く伝わってきた／JKI のおかげでドイツでは聴くことのできない音楽を聴くことができた機会に感謝したい／歌声は私の好みに合わなかった

iv．どのくらいの頻度で JKI の催物に来場していますか？

今回初めて	11	18.33%
2～5 回め	13	21.67%
6 回以上	10	16.67%
定期的に	28	46.67%

v．今後どのような JKI の催物を望みますか？
舞台芸術（10）{能（3）／雅楽（2）／文楽（2）／影絵芝居（1）}／音楽（9）／伝統芸能・文化（6）／映画（3）／絵画（2）／舞踊（2）／茶道（2）／園芸（2）／建築（1）／ポップミュージック（1）／写真（1）／他

vi．改善点・要望などのコメント
もっと宣伝してほしい／19 時 30 分の開演ならボン方面からも間に合うと思う／他

図 2 レーゼ氏による解説

図 3 公演中の舞台（背面に字幕が写し出されている）

vii. あなた自身のことについて教えてください

(1)年齢

18 歳以下	0	0.00%
19-29 歳	7	11.67%
30-39 歳	4	6.67%
40-49 歳	12	20.00%
50-59 歳	12	20.00%
60 歳以上	21	35.00%

(2)性別

男性	26	43.33%
女性	24	40.00%

図 4 休憩中の様子（楽器に興味を示す観客）

(3)職業

年金生活者（8）／学生（5）／情報工学者（3）／芸術家（2）／グラフィックデザイナー（2）／経済学者（1）／音楽家（1）／製本業（1）／研究者（1）／医者（1）／音楽アーキビスト（1）／商社員（1）／経営者（1）／歯科技師（1）／陶芸家（1）／編集者（1）／芸術史学者（1）／生徒（1）／旅行業（1）／看護士（1）／アナウンサー（1）／公務員（1）／医療士（1）／電気技術者（1）／設計士（1）／翻訳者（1）／俳優（1）／ジャーナリスト（1）／エンジニア（1）／他

ケルン公演の前日には舞台上に毛氈や金屏風が設置され、照明のチェック、楽器の出入りの確認も念入りに行なわれた。ドイツ人学生のスタッフも見台の持ち方の指導を受けながら協力するシーンが見られた。今回のプログラムは前半に山田流箏曲《六段の調》と一中節《家桜傾城姿》、休憩後の後半には山田流箏曲《桜狩》と一中節《松の羽衣》が上演された。公演の前にはレーゼ氏による短いレクチャーが行われ、山田流箏曲と一中節についての概説、公演者について、この音楽の聴き方等がドイツ語で簡潔に説明された(図 2)。また、公演中には、レーゼ氏がドイツ語に翻訳した字幕が語りに合わせて映し出された(図 3)。

公演のタイトルに„subtilen“「繊細、精緻」という言葉を選んだのもレーゼ氏自身である。ここには、強すぎず弱すぎず、繊細で微妙な音の響きの変化を感じてもらいたいという意味が込められていると氏は語っていた。その解説の効果のためか演奏中の会場は静まり返り、観客が音に集中している様子が感じられた。全ての演奏の終了時にはそれまでの静寂から一転して、堰を切ったように拍手が鳴り響いた。ドイツ国内における日本の伝統芸能に対する関心の高さについては聞いていたが、その実際の熱気に触れ改めて驚いた。ベルリン公演の休憩時間には舞台上に設置された箏と三味線を至近距離から見るために観客が群がり写真に収めている様子も観察できた(図 4)。ただし、観客の年齢層がやや高めであることが主催側の懸念するところであり、これは日本においてもドイツにおいても同様の問題であるのかもしれない。

今回公演を行なったのは一中節の 12 代目家元である都一中、都了中、川村京子（都一すみ）、山下名緒野（都一恵）の 4 名。公演後、都一中氏から伺った話の中で「海外で公演する時にも、本物をそのままお届けしたい」、「演奏後も拍手が鳴り止まず、外国のお客様が積極的に受け入れて下さっていると感じる」という言葉は印象的であった。

5. ⑷ドイツ国立図書館における原書の閲覧

ドイツ語圏には、シーボルト（Philipp Franz von Siebold 1796-1866）が著した分冊形式の大著『日本 *NIPPON. Archiv zur Beschreibung von Japan*』、レオポルト・ミュラー（Benjamin Karl Leopold Müller 1824-1893）による「日本音楽に関するノート Einige Notizen über die japanische Musik」、アブラハム（Otto Abraham 1872-1926）とホルンボステル（Erich von Hornbostel 1877-1935）の論文「日本人の音組織と音楽に関する考察 Studien über das Tonsystem und Musik der Japaner」等、初期の日本音楽研究のエポックと言える著述が残されている。柘植元一により 1986 年に刊行された『日本音楽論著解題目録 *Japanese Music : An Annotated Bibliography*』には、1983 年末以前に英独仏を主とする言語で公刊された日本音楽に関する論著の解題が 881 点掲載されている。英語文献が圧倒的多数を占めているが、そのうちドイツ語文献は 154 点みられた。ここで取り上げられた最も古いものは、ローレンツ・クリストフ・ミツラー（Lorenz Christoph Mizler 1711-1778）が 1746 年にライプツ

ィヒで出版した『日本の楽器の図と短い解説 *Abbildung und kurze Erklaerung der musikalischen Instrumenten der Japoneser*』である。

今後、研究範囲を拡大していく上で、日本音楽受容の歴史的変遷を辿るため、ドイツ語で著された文献資料にアプローチしたいと考えている。今回の調査では、岸辺成雄、柘植元一、シルヴァン・ギニャールによる先行研究を参考に、ドイツ語圏の日本音楽に関する文献をリスト化し、原書の探索を試みた。調査動線を考慮した結果、訪問先として、ドイツ東部の都市ライプツィヒに位置するバッハアーカイブ（Bach Archiv Leipzig）とドイツ国立図書館（Deutsche National Bibliothek (DNB)）の 2 箇所を選択した。バッハアーカイブでは、*Abbildung und kurze Erklaerung der musikalischen Instrumenten der Japoneser* のファクシミリを閲覧することができた。また、1913 年以降にドイツ国内で出版された資料を収集しているドイツ国立図書館では、鼓常良（1887-1981）による独語著書[4]、*Die Musik in Geschichte und Gegenwart*（MGG）の「日本」の項目を担当したハンス・エッカルト（Hans Eckardt 1905-1969）の文献[5]、チェンバロ奏者であり日本音楽に関する多くの記述も残しているエタ・ハリッヒ=シュナイダー（Eta Harich-Schneider 1897-1986）の書籍[6]を閲覧した。

6. 現在までの研究と今後の研究計画

卒業論文研究のため 2009 年に初めてケルンを訪れ、永原恵三教授の紹介によりケルン日本文化会館に勤務するハインツ=ディータ・レーゼ氏にインタビューを行なう機会を得た。レーゼ氏は、ケルン大学において日本音楽を専門的に修め、現在もドイツ国内をはじめ欧州各地において日本から演奏家を招聘した公演の企画や日本音楽の紹介活動に携わっている。彼の作成する公演冊子や公演中のドイツ語字幕、および数多くのラジオ番組等は緻密な研究を経て構成されたものである。卒業論文では、レーゼ氏より提供を受けた 1993 年の市川猿之助一座によるベルリン／デュッセルドルフ公演を紹介した TV 番組（Sender Freies Berlin 制作）の映像資料と公演パンフレットの分析を行なった。2011 年には DAAD（ドイツ学術交流会）の助成を受け、2 ヶ月間ドイツに滞在する機会を得たため、再度ケルンを訪問した。その際レーゼ氏と面会を重ね、彼の活動についてより詳細に知ることができた。修士論文では、日本音楽の海外発信において重要な役割を果たすレーゼ氏の仲介者としての側面に言及し、具体的な公演の事例として 2009 年に行なわれた素浄瑠璃のドイツ公演を取り上げた。

今回の海外調査研究によって、ケルン日本文化会館の事業報告書の全データを入手したことで、過去 45 年間にどのような公演が行なわれてきたのか概観することを可能としたことが、まず 1 つの成果であると考えている。また、過去 2 回の渡独の際には叶わなかった、レーゼ氏の仲介による実際の公演現場を見ることができたことも貴重な機会であった。更に、1983 年の「日本週間」について、当地の図書館でしか手にすることのできないプログラム冊子や新聞記事等のコピーを得たため、これらの収集した資料を分析し、日本音楽受容の一端を明らかにしたいと考えている。現在予定しているテーマは、「ドイツ語圏における日本音楽−ケルン日本文化会館の活動から−」また、「ドイツ語圏における日本音楽−1983 年開催の日本週間を事例として−」であり、今後、お茶の水音楽研究会『お茶の水音楽論集』若しくは、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科『人間文化創成科学論叢』への論文投稿を目指したい。可能であればこれらを再構成し、東洋音楽学会での発表も視野に入れている。今回の調査研究で得た資料及びフィールドワークによって現地で築いた人脈は、最終的な目標とする博士論文執筆の際に中核となる役割を果たすと考えられる。また、今回の滞在中に閲覧することができたローレンツ・ミツラーの資料等、歴史的な文献についても、今後の研究において活用するべく継続的且つ多角的に検証を行ないたい。

注

1. ケルン大学音楽学研究所のロベルト・ギュンター（Robert Günther 1929-）の編纂により、1977 年にベーレンライター社から刊行された。ワルター・ギーゼン（Walter Giesen 1935-）による「日本仏教声楽史」、吉川英史（1909-）著『日本音楽の性格』のドイツ語翻訳の他、イングリット・フリッチュ（Ingrid Fritsch）、アンドレアス・グツヴィラ（Andreas Gutzwiller 1940-）、ハインツ=エバーハルト・シュミッツ（Heinz-Eberhard Schmitz 1950-）、ペーター・アッカーマン（Peter Ackermann 1954-）等による論文が掲載されている。
2. 日独双方の音楽学者による日本音楽研究のシンポジウムシリーズ。1978 年・1979 年・1981 年・1986 年に開催された。ロベルト・ギュンターが「ドイツ学術交流会 Deutscher Akademischer Austausch Dienst（DAAD）」の助成で平野健次をケルンに呼び寄せたことが開催のきっかけとなった。
3. 2002 年以降は紙媒体での記録が保存されていない。その代替として、2000 年以降の事業記録は web 上の PDF ファイル（http://www.jki.de/ueber-uns/taetigkeitsberichte.html）において参照することが可能。
4. Tsuzumi, Tsuneyoshi: *Die Kunst Japans*, Leipzig, Insel Verlag, 1929.

5. Eckardt, Hans: *Das Kokonchomonshu des Tachibana Narisue als musikgeschichtliche Quelle*, Wiesbaden, Otto Harassowitz Verlag, 1956.
6. Harich-Schneider, Eta; Fritsch, Ingrid (Hrsg.): *Musikalische Impressionen aus Japan 1941-1957*, München, Iudicium Verlag, 2006.

参考文献

岸辺，成雄（1981）「外国人の日本音楽研究」『日本音楽大事典』平凡社：32-33.
ギュンター，ロベルト（1989）「ケルン日本文化会館の音楽活動」『ケルン日本文化会館二十年史』：108-110.
柘植，元一（1994）「海外における日本音楽研究—総論」『東洋音楽研究』59：102-115.
ギニャール，シルヴァン（1996）「海外における日本音楽研究—ドイツ語圏」『東洋音楽研究』61：47-52.
国際交流基金 30 年史編纂室（編）（2006）『国際交流基金 30 年のあゆみ』東京：国際交流基金.
ケルン日本文化会館（編）（2009）『ケルン日本文化会館開館 40 周年記念誌』ケルン：ケルン日本文化会館.

たなべ　さおり／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

田辺沙保里さんの、今回の海外調査研究は大変有意義であったと評価できます。まず、第一に、これまで築いてきたハインツ＝ディータ・レーゼ氏との信頼関係によって、実際の公演における調査ができたこと、第二にケルンの日本文化会館の資料をまとまったかたちで入手できたこと、そして第三にドイツにおける日本音楽研究に関する一次資料にアクセスできたことが大きな成果です。田辺さんの研究は修士論文を東洋音楽学会で発表した際に、研究者を文化の仲介者として、研究の俎上に載せたことで高く評価されました。また、従来、海外の研究者による日本音楽研究はありましたが、日本の研究者自身が視点を海外に置いて、そこから日本音楽を研究することはほとんどなく、田辺さんは全く新たな視点で研究しています。それだけに現地の人的ネットワークが必要ですが、今回の調査研究では、これまでの努力を生かして、充実した内容になったと言えます。今後の活躍が大いに期待されます。

（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科文化科学系・永原　恵三）

A research for Japanese traditional music studies and performances in the German-speaking Countries

Saori Tanabe

The purpose of this research is to survey the source materials about Japanese traditional music studies in the perspective of cultural outsiders and make a participant observation of the concert projects managed by a coordinator, Heinz-Dieter Reese belonging to *Japanisches Kulturinstitut* (JKI). During this stay in Germany, first, I visited JKI and made an electric Photo data of the reports, *Übersicht der Tätigkeit*, secondly I often had an interview with Mr. Reese and got a lot of suggestion and advice about my research, thirdly I could have an opportunity of looking through some books about Japanese traditional music written in German in *Bach Archiv Leipzig* and *Deutsche National Bibliothek*.